

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 富永泰代

20世紀初頭のオランダ領東インドで活躍したカルティニについては、長い間、1911年にアベンダノンが、カルティニの書簡を編集して刊行した『闇を越えて光へ』(以下1911年版)に基づいて議論がなされてきた。本論文は、カルティニがアベンダノン夫妻にあてて送った現存する書簡を網羅的に所収して1987年に刊行された *Brieven : aan mevrouw R.M.Abandanon-Mandri en haar echtgenoot* (アベンダノン夫人とその夫へ宛てた書簡集、以下1987年版)に依りながら、1911年版がどのようにカルティニの書簡に意図的な編集を行ったのかを解明し、1911年版に依らない新たなカルティニ像を描こうとしたものである。

1987年版に依拠して1911年版を体系的に批判した本研究は、国際的に見て、先駆的な業績とすることができる。そこでは、たとえば、1911年版では倫理政策の文脈で「女子教育推進者」としてのカルティニという像を強調するために、実際には書簡の中で大きな比重を占め、カルティニの社会活動として重要な位置をもっていた木彫工芸振興活動を無視ないし軽視していること、また、アベンダノンが、カルティニが自らの私的な希望をアベンダノン夫人に理解してもらうために使った「光と闇」という二元論を、倫理政策の文脈に置き換え、かつヨーロッパ市場での本の売れ行きも考慮したため、『闇を越えて光へ』というタイトルを用いたことなどが指摘されている。このような分析を通じて、本論文は1911年版の編集意図を浮き彫りにすることに成功している。

筆者は、1987年版を丹念に読み込むことにより、個人の解放を希求し、それを「我々の美しい地球」というような言葉に象徴される、すぐれて地球的・普遍的な志向に結び付けていたカルティニの「実声」「実像」が浮かび上がるとし、これに対して、アベンダノンの編集による1911年版から描かれたのは、カルティニを植民地主義的な「大オランダ」や民族主義的な「インドネシア」といった枠組みに押し込めてしまうものであったと批判する。

審査委員会では、本論文について、次のような問題点が指摘された。第一は、1911年版によるカルティニ解釈が虚像であるとしても、1987年版が必ずしもカルティニの「実像」を導きうるとは言えないし、また、その前提となる1987年版に対する史料批判が不十分なのではないか、第二に、「地球」という言葉をカルティニが使用していたとしても、それを今日の思潮に引き付けて解釈するのは、議論を「現代化」し過ぎるのではないか、第三に、19世紀末から20世紀初頭のジャワの社会史、あるいはジャワ貴族社会という文脈での歴史的考察をもっと強めるべきではないか、第四に、全体として、カルティニ一辺倒の解釈に終わり、その周辺の人物や周辺事象の分析が疎かになっているのではないか、などである。

本論文については、以上のような問題が指摘された。しかしながら、審査委員会では、カルティニに対する深い洞察なしには本論文は完成しなかったであろうこと、本論文には様々な問題点があるものの、カルティニ研究の新次元を導いたことは評価すべきであることを認め、全員一致で博士(文学)の授与にふさわしいものであると判定した。